

冬の桃
西東三鬼

冬の桃

神戸
統神戸
俳愚伝

西東三鬼

冬の桃

—— 神戸・続神戸・俳愚伝

昭和五十二年三月二十五日 印刷
昭和五十二年四月五日 発行

著 者 西東三鬼

編集人 桑原隆次郎

発行人 伊奈一男

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋
〒550 大阪市北区堂島上
〒813 北九州市小倉北区紺屋町
〒440 名古屋市中村区堀内町

印刷 東京ベル印刷

製本 大口製本

冬の桃

— 神戸・続神戸・俳優伝

西東三鬼

目次

神戸 7

奇妙なエジプト人の話 9 波子という女 18

勇敢なる水兵と台湾人 29 黒パンと死 39

ドイツ・シェパード 59 自動車旅行 68

鱧の湯びき 88 猫きちがいのコキユ 100

月下氷人 48
トリメの紳士 78

続神戸 111

マダムのこと 113

再び俳句へ 135

流々転々 156

三人の娘さん達 123
サイレンを鳴らす話 145

俳愚伝 167

わが投句時代 169

無季俳句の時代 206

俳句弾圧はじまる 230

弾圧家族 265

連盟分裂す 277

「新俳話会」結成の前後 181

「天香」の創刊まで 219

新興俳句は死刑か 242

わが俳句開眼 193

真夏の夜の悪夢 253

西東三鬼略年譜

装幀 井上敏雄

冬の桃

— 神戸・統神戸・俳優伝

神
戸

第一話 奇妙なエジプト人の話

昭和十七年の冬、私は単身、東京の何もかもから脱走した。そしてある日の夕方、神戸の坂道を下りていた。街の背後の山へ吹き上げて来る海風は寒かったが、私は私自身の東京の歴史から解放されたことで、胸ふくらむ思いであった。その晩のうちに是非、手頃なアパートを探さねばならない。東京の経験では、バーに行けば必ずアパート住いの女がいる筈である。私は外套の襟を立てて、ゆっくり坂を下りて行った。その前を、どこの横町から出て来たのか、バーに働いていそうな女が寒そうに急いでいた。私は猟犬のように彼女を尾行した。彼女は果して三宮駅の近くのバーへはいったので、私もそのままバーへはいって行った。そして一時間の後には、アパートを兼ねたホテルを、その女から教わったのである。

それは奇妙なホテルであった。

神戸の中央、山から海へ一直線に下りるトーアロード（その頃の外国語排斥から東亜道路と呼ばれていた）の中途に、芝居の建物のように朱色に塗られたそのホテルがあった。

私はその後、空襲が始まるまで、そのホテルの長期滞在客であったが、同宿の人々も、根が生えたようにそのホテルに居据わっていた。彼、あるいは彼女等の国籍は、日本が十二人、白系ロシア女一人、トルコタール夫婦一組、エジプト男一人、台湾男一人、朝鮮女一人であった。十二人の日本人の中、男は私の他に中年の病院長が一人で、あとの十人はバーのマダムか、そこに働いている女であった。彼女等は、停泊中の、ドイツの潜水艦や貨物船の乗組員を持ち込んで来る、罐詰や黒パンを食って生きていた。しかし、そのホテルに下宿している女達は、ホテルの自分の部屋に男を連れ込む事は絶対にしなかった。そういう事は「だらしない」といわれ、仲間の軽蔑を買うからである。

その頃の私は商人であった。しかし、同宿の人達は、外人までが（ドイツの水兵達も）私を「センセイ」と呼んでいた。（何故、彼等がそういう言葉で私を呼ぶようになったかについては、この物語の第何話かで明らかにする。）

彼女達は「センセイ」の部屋へ、種々雑多な身辺の問題を持ち込んで来たり、県庁の外事課

に睨まれている外人達は、戦時の微妙な身分上の問題を持ち込んで来た。

私の商売は軍需会社に雑貨を納入するのであったが、極端な物資の不足から、商売はひどく閑散で、私はいつも貧乏していた。私は一日の大半を、トアーロードに面した、二階の部屋の窓に頬杖をついて、通行人を眺めて暮すのであった。

その窓の下には、三日に一度位、不思議な狂人が現われた。見たところ長身の普通のルンペンだが、彼は氣に入りの場所に来ると、寒風が吹きまくっている時でも、身の廻りの物を全部脱ぎ捨て、六尺禪一本の姿となって腕を組み、天を仰いで棒立ちとなり、左の踵を軸にして、そのままの位置で小刻みに身体を廻転し始める。生きた独楽のように、グルグルグルグルと彼は廻転する。天を仰いだ彼の眼と、窓から見下ろす私の眼が合うと、彼は「今日は」と挨拶した。

私は彼に、何故そのようにグルグル廻転するかと訊いてみた。「こうすると乱れた心が静まるのです」と彼の答は大変物静かであった。寒くはないかと訊くと「熱いからだを冷ますのです」という。つまり彼は、私達もそうしたい事を唯一人実行しているのであった。彼は時々「あんたもここへ下りて来てやってみませんか」と礼儀正しく勧誘してくれたが、私はあいかわらず、窓に頬杖をついたままであった。

彼が二十分位も回転運動を試みて、静かに襤褸をまとして立ち去った後は、ヨハネの去った荒野の趣であった。それから二年後には、彼の氣に入りの場所に、天から無数の火の玉が降り、数万の市民が裸にされて、キリキリ舞をしたのである。

下宿人のエジプト人マジット・エルバ氏は私の親友となった。彼は当時日本に在留する唯二人のエジプト人の一人であった。いわゆる敵性国人であったが、引き揚げなかった他の英米仏人達と同様に、旅行は許されなかったが、神戸市内では一応自由であった。彼はこの奇妙なホテルでの、最も奇妙な人物であった。商売は肉屋で、山の手の通りに清潔な店を持っていたが、もう商品はカラッポであった。彼はその店に独り住む事を好まず、わざわざホテルに滞在していた。年は幾つなのか、さっぱり見当がつかないが、多分四十歳そこそこであつたろう。小麦色の彫りの深い顔には、いつも鬚の剃り跡が青々としていた。恐ろしく胸の厚い男で、まるで桶の胴のようであつた。こういう放浪者に似ず、英語も日本語も下手糞であつた。日本滞留十年で、ヨーロッパ、アメリカ、南米と流浪の末、日本神戸に根の生えたエジプト種の強い蘆である。私は青春時代を、赤道直下の英領植民地で暮したので、彼のコスモポリタン気質はよく判った。彼のお国自慢は、名前のエルバに由来し、彼の説に従えば、彼は正しくナポレオンの追放された島の出生だというのである。彼は何度もこの話をしたが、その時の彼はナポレオン

の落胤のような顔をした。

マジットも私も貧乏だったので、夜は大抵どちらかの部屋で、黙って煙草を吹かすのが常であった。私の部屋には十数枚のレコードがあった。それは皆、近東やアフリカを主題とした音楽で、青年時代からの、私の夢の泉であった。私達は、彼が何処からか探し出してくるビールを、実に大切に飲みながら、一夜の歓をつくすのであったが、彼はレコードの一枚毎に「行き過ぎの鑑賞」をして、砂漠のオアシスや、駱駝の隊商や、ベルシャ市場の物売婆を呼び出し、感極まってでたらめ踊りを踊り、私はそれに狂喜の拍手を送るのであった。そういう我等を見守るのは、どのような神であったか、所詮は邪教の神であって、一流の神様ではなかったであろう。

神様といえば、マジットは回教徒で、宗門の戒律は嚴重に守っていた。ある時、彼は齒槽膿漏が悪化して高熱を出し、頬を腫らして遂に市民病院に入院した。私は親友のために、毎日一度づつ、手料理を作って自転車で運んだが、ある日、マッシュド・ポテトを作り、うっかりペーコンを刻み込んだまま、彼の枕頭に供した。彼は歓声を上げて口一杯に頬張ったが、ウツという声と共に全部吐き出し、大急ぎで嘔をした。ペーコンは豚で、それは回教徒のタブーである。彼は世にも情ない顔をして「センセイ、ダレニモイウナ」といった。

このエジプト人が、どこから生活費を得て来るのか、誰にも判らなかった。彼が時たま、牛

肉の大塊をホテルの厨房に売りつけると、翌日の新聞に、姫路郊外で耕牛が一頭盗まれ、加古川の河原で密殺された記事が出るのであった。哀しきエジプト人は、独特のルートから、そういうものを仲買していたのであらう。彼は随分窮乏していたが、一度も私に金を貸せと言わなかった。私の貧乏をよく知っているのだ。彼の入院中、私が当時の金で五十円作って見舞のつもりで与えたら、退院するとすぐ「ワタシピンボウ、センセイピンボウ」といって返してよこした。そういう彼に、私には合点のゆかない意外な大金がはいることがある。彼は忽ちサルタンになって、日頃のウッパンを一夜にして放散する。いつも文無しの彼を軽蔑している同宿の淑女達の中で、最も若く、最も豊満な一人を選んで、彼女のバーに押しかけ、札びらを切った末、どこかのホテルで一夜を明かして来るのだ。翌日、彼女は忽ち富み、彼は再び貧しい。あまりの事に柄にもなく私が忠告がましい事をいうと、彼は得意のウイंकを一発放って「オーマー・カイヤム」と呪文のように、ペルシャ楽天詩人の名を称え、あまつさえ、マリ子が水を飲むと、透き通った咽喉を、水の下りるのが見えたなどとのろけるのであった。

マジットにはカイロに富商の伯父があるとかで、その伯父さんが、日本に足止めを食らって窮乏している甥に大金を送って来ますようにというのが、彼のアラーの神への日夜の祈禱であった。彼に従えば、その金額は、十人のマリ子を一年位満足させるに足りるのであった。送金